

ふるさと見て歩き

第49回

西塙遺跡

◇縄文時代の 大規模遺跡

西塙遺跡は御前山地域野口地区字西塙にあります。佐伯神社西側の道路拡張のため、平成十九年十二月から発掘調査が始まりました。西塙遺跡はそれまでも縄文土器や石器が耕作中に出土する場所として知られていて、発掘調査にも注目が集まりました。

西塙の地は南に那珂川を望む標高五十五メートルの台地上にあり、東側には縄文時代以来の立木遺跡、野口城跡が近距離で存在します。食料採取や舟運の便の良い川に臨む住みやすい場所だったことが分かります。九一七〇平方メートルを発掘した今回の調査では、全体で四〇〇もの土坑（あな）が発掘されました。このうち二八八基が縄文時代中期から後期（今から約四千〜五千年前）のものでした。これらの土坑は底面が平坦で一定の広さを持っています。底面から開口部までが垂直に近い形で立ち上がる円筒型と底面部に比べて開口部が小さい袋型などの形があり、後者は特に「フラスコ状土坑」などとも呼ばれます。ドングリヤチの実などの貯蔵用に掘られたと考

えられます。また、これらの土坑から多くの縄文土器が出土しています。

◇有段竪穴建物跡と火炎土器

西塙遺跡からは県内では珍しい遺構・遺物の発見がありました。その一つは「有段竪穴建物跡」です。縄文時代以来、奈良・平安時代頃まで長く庶民の家であった竪穴住居は家の敷地を一段掘り下げ、数本の柱を立てて萱などの植物で屋根を地面まで葺きおろす構造になっていました。有段竪穴建物跡は竪穴住居の掘り下げた床面に更に段差がついているものです。県内でも数例しか確認されていない珍しい遺構です。なぜこのように床に段差がつけられたのか、詳しいことは分かっていません。

発掘された貯蔵穴群の多さに比べて住居跡は極めて少なく、今回の発掘場所が集落の貯蔵区域にあたる場所だったことが推測されます。



▲有段竪穴建物跡

としてもう一つの発見は火炎土器です。火炎土器は昭和十一年に近藤篤三郎氏が馬高遺跡（新潟県長岡

市）で発見した炎のような形状の一つの土器を「火焔土器」と命名したことに始まります。その後、火焔土器と似た特徴を持つ土器を「火焔型土器」と呼ぶようになり、それらと「王冠型土器」など同様の雰囲気を持つ土器をあわせて「馬高式土器」、「火炎土器」と呼ぶようになりました。

国宝に指定されているものもあるので、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、その特徴はなんといっても火炎を表現したような装飾性の高い形状です。他に、鶏のトサカのような大きな四つの突起・鋸歯状口縁・縄目を使わず隆起線や沈線文である、という特徴があります。縄文時代中期中葉（約四五〇〇年前）に新潟県の信濃川中流域を中心とした地域で作られていました。新潟県北部で日本海に注ぐ阿賀野川流域でも多くの火炎系土器が発掘されています。福島県の会津地方などで特に多く、ここを経由して周辺地域に広まったことが想像されます。

では、西塙遺跡出土の火炎土器について見てみましょう。土器は全体の四分の一ほどが発見され、接合が可能でした。口縁部に大きく装飾的な把手が付いています。これらの把手は土器全体に等間隔に付けられていると思われ、四つの区画に分かれていたと推測されます。口縁部から胴部にかけて、円やS字を描くような複雑な模様が入り、まさに炎が燃え盛っているようです。低温で焼かれたため、全体にもろく、良質な土器とはいえません。火炎土器の県内で

の出土例はごく少数ですが、そのいずれも新潟産ではなく、その周辺で、新潟の土器をまねて作られたもののようにです。西塙遺跡出土の火炎土器も同様の経緯のものと思われ、確かによく見ると技術の甘さも垣間見えるような…。



▲参考：新潟県山遺跡出土の国宝火焔型土器（十日町市博物館蔵・茨城県立歴史館図録『縄文の村弥生のムラ』2006より）



▲西塙遺跡出土の火炎土器

△参考文献・図版引用▽
常陸大宮市教委・株式会社パスコ『西塙遺跡発掘調査報告書』、常陸大宮市教委・有限会社日考研茨城『西塙遺跡発掘調査報告書』2009、栃木県立なす風土記の丘資料館企画展図録『川でつながる縄文人』2007
歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450